

主の回復における唯一の働き

(金曜日——午前の第一の部)

メッセージ 4

**キリストの大使となって和解の務めを行ない、
すべてに適合する命によって神の同労者となる**

聖書：Ⅱコリント 5:4, 9, 14-16, 18-20. 6:1, 7:2-3

I. わたしたちはキリストの大使となって、和解の務めを行なう必要があります：

A. キリストの大使たちはキリストの代理であり、宇宙における最高の権威の代理です：

1. 神は天においても地においても、いっさいの権威をキリストに与えました——マタイ 28:18。
2. 神はキリストを立てて、王の王また主の主としました——Ⅰテモテ 6:15, 啓 17:14。

B. キリストの大使たちは、彼らであることによって、あるいは彼らができることによって生きるのではなく、不死の命によって、すなわち、彼らの内側におられるキリストご自身によって生きます——Ⅱコリント 5:4：

1. わたしたちができることは何であれ、わたしたちであることは何であれ、わたしたちが持っているものは何であれ、消え去ります。こういうわけで、わたしたちは、わたしたちであることに全く信頼すべきではありません——1:8-9。
2. わたしたちは、不死の命としてのキリストがわたしたちの内側にいることを認識する必要があります。わたしたちはこの命に信頼し、この命によって生き、この命によって働くべきです——13:3。

C. キリストの大使たちは、彼に喜ばれようと懸命に努めています——5:9：

1. 懸命に努めることは、強い目標をもって熱心になり、主に喜ばれようと懸命に奮闘することです——コロサイ 1:10, ヘブル 11:5-6。
2. わたしたちはキリストを代行して彼の大使となろうとするなら、次のように祈るべきです、「主よ、わたしは天と地に呼び求めて証しします。わたしには一つの大望があります。それはただあなたを喜ばせることです」。

D. キリストの大使たちは、キリストの愛によって押し迫られて、彼に生きます——Ⅱコリント 5:14-15：

1. 押し迫られることは、水の流れによって運び去られることに似ています。キリストの愛は水の流れのように強く、わたしたちを征服し、わたしたちを運び去ります。
2. キリストの愛はわたしたちに押し迫って、自分自身ではなく、彼に生きるようにさせます：
 - a. 自分自身に生きることが意味するのは、わたしたちが自分自身の管理、指示、支配の下にあって、自分自身の目的や目標を顧慮しているということです。
 - b. 主に生きることは、完全に彼の管理、指示、支配の下にいることです。それ

が意味するのは、わたしたちの行なうすべてのことが、主の定められた御旨と願いを成就するためであるということです。

c. 主に生きることが意味するのは、わたしたちが日常生活のあらゆる面において主を喜ばせることを追い求めるということです。

d. 主のために生きるとは、わたしと主が依然として二者であることを意味します。主に生きるとは、わたしが主と一であることを示します。それは、結婚生活において妻が夫と一であるようにです。

E. キリストの大使たちは、肉にしたがってではなく、霊にしたがって人を認識します—16節：

1. わたしたちは肉において外観にしたがってではなく、霊の中でキリストの度量にしたがって事を承認し、人を認識する必要があります。

2. 人々は職業、地位、才能、能力にしたがって認識されるかもしれませんが、召会の中でわたしたちは内なる人にしたがって、すなわち、霊にしたがって人を知るべきです。

F. キリストの大使たちは、和解の務めを遂行します：

1. 和解の務めは、罪人を神へと連れ戻すだけではなく、信者たちを神の中へともたらし、彼らを完全に神と一にすることです—18-20節。

2. わたしたちが神に完全に和解させられるときはじめて、わたしたちは完全に救われます—6:1-2. ローマ 5:10. ヘブル 7:25。

3. わたしたちが人を神にもたらすことのできる程度は、神に関してわたしたちがどこにいるかによって常に測られます。わたしたちは彼の中にいればいるほど、ますます人を彼の中へと和解させることができます—IIコリント 12:2前半. 5:20。

II. わたしたちはすべてに適合する命によって神の同労者となる必要があります：

A. わたしたちは命によって（どんな賜物によってでもなく）神と共に働く必要があります。その命は、すべてに十分で、すべてに円熟し、すべての状況に適合することができ、どんな取り扱いにも耐え忍ぶことができ、どんな種類の環境も受け入れ、どんな種類の状態の下でも働き、どんな種類の機会でも捕らえて、わたしたちの務めを完成します—6:1前半。

B. わたしたちが完全に救われ、すべてに適合する命を持つなら、どんな状況や境遇も、わたしたちが命を人に供給するのに適しています—ピリピ 1:20. 4:22. IIテモテ 4:2前半. 参照、歴代下 1:10。

C. わたしたちがすべてに適合する命を持とうとするなら、広くされた心、すなわち、神のすべての民を受け入れる心を持つ必要があります—IIコリント 6:11-13. 歴代下 1:10. 列王上 4:29：

1. 命において成長し、円熟することによって広くされることは、完全に神に和解させられることに等しいのです。

2. わたしたちは広くされた心をもって、すべての信者を、その状態にかかわらず受け入れることができます。またわたしたちは開かれた口をもって、すべての

信者が間違っ導かれていいる実際の状況に関して彼らに率直に語る自由があります。——マタイ 5:7. 6:14-15. 7:1-2。

D. わたしたちは広くされて、命を供給するうえでの親密な心遣いを持つ必要があります——Ⅱコリント 7:2-3. Iテサロニケ 2:8. ペリピ 2:19-20 :

1. わたしたちが働きを遂行する能力を持っていても、親密な心遣いに欠けるなら、わたしたちの働きは実を結びません。わたしたちが御父の愛し赦す心と、救い主キリストの牧養し捜し求める霊を持っていないことが、わたしたちが実を結ばないことの原因です——参照、ルカ第 15 章。
2. 雄弁さ、賜物、力は、人々に対するわたしたちの心遣いほど深く彼らに触れることはできません——参照、Iコリント 12:31 後半. IIテモテ 1:7. ピレモン 9-12 節。
3. どれほどわたしたちが実を結ぶかは、わたしたちができることによるのではなく、わたしたちが親密な心遣いを持っているかどうかによります——Ⅱコリント 12:15. Iコリント 9:22. マタイ 9:12。
4. 供給する命は、イエスの人性において人をはぐくんで彼らを温め、キリストの神性において、キリストの豊富をもって人を養う命です——エペソ 5:29. 箴 25:15。
5. パウロは養う母、勤める父のように聖徒たちを牧養しました——Iテサロニケ 2:7-8, 11-12. 使徒 20:19-20, 27, 31。
6. パウロが弱い人の水準に下ったのは、彼らを得ることができるためでした——Ⅱコリント 11:28-29. Iコリント 9:22. 参照、マタイ 12:20。
7. パウロは召会を愛する者として、召会を愛するキリストとの一の中にあり、進んで聖徒たちのために彼が持っていたもの（彼の財物を指す）と、彼であるもの（彼の存在を指す）を費やして、キリストのからだを建造しました——エペソ 5:25. IIコリント 12:15. 11:28-29。

務めからの抜粋：

新契約の奉仕者

第7章は、新契約の奉仕者に関するコリント人への第二の手紙の区分の一部分です。この区分でパウロは、新契約の奉仕者が生きた命を描写しています。このメッセージでは、第7章2節から7節で表現されたようなパウロの霊の中の感覚に触れることを求めます。第7章2節から16節を読むとき、重要な事柄は、パウロの感覚と彼の霊に触れることです。しかしながら、これを行なうことは容易ではありません。

命を供給するうえでの親密な心遣い

第7章2節から16節にあるのは、命を供給するうえでの親密な心遣いです。主を愛し、神の標準に達しようとするすべての信者は、新契約の奉仕者になるべきです。わたしたちはキリストにある信者である限り、使徒、伝道者、長老、執事であっても

なくても、新約の奉仕者であるべきです。そのような奉仕者は、キリストを他の人に供給して、召会、彼のからだを建造する人です。わたしは若かったころ、すべての信者は福音を宣べ伝える者であるべきであると聞きました。今やわたしたちは、単に福音を宣べ伝える者であるだけでなく、新契約の奉仕者、すなわち、命としてのキリストを供給する者であるべきであることを知っています。それは、召会がキリストのからだとして建造されるためです。この務めはただ使徒たちや長老たちによって遂行されるべきではありません。それは召会のすべての人によって遂行されるべきです。

今日、主の回復の目標は、すべての信者によってキリストが供給され、召会が建造されることを回復することです。この理解は、エペソ人への手紙第4章のパウロの言葉に基づいています。その所で彼は、使徒、預言者、伝道者、牧する者また教える者が、聖徒たちを成就して、その務めの働きへと、キリストのからだの建造へと至らせると言っています。わたしたちすべてが召会を建造する者となり、キリストを供給して召会を建造するためには、供給する命を必要とします。新契約の奉仕者となるためには、そのような供給する命を必要とします。わたしたちは召会のために、キリストを人に供給する命を生きる必要があります。

わたしは何年も前に、霊的で、^{きよ}聖く、勝利を得るように信者たちを励ますさまざまな本を読みました。しかしわたしは、供給する命を生きるように勧めている本を決して読んだことはありません。わたしたちの多くは、どのようにして霊的になるか、どのようにして聖い生活をするか、どのようにして勝利を得るかについての本を読みました。しかしあなたは、どのようにして供給する命を生きるべきかを告げる本を読んだことがあるでしょうか？ わたしたちのだれもそのような本を読んだことはない、わたしは信じます。

約五十年の訪問において、わたしはさまざまなクリスチャンに出会いました。特に、霊的であることで名声のある人たちに出会ったことがあります。しかし、わたしの記憶では、これらのいわゆる霊的な人たちでさえ、正しく供給する命を持っていませんでした。彼らは「霊的で」、「聖い」、「勝利を得る」ことのためにとても注意深く生きました。しかし、彼らは供給する者として生きませんでした。わたしたち自身の努力によるのではなく、主の恵みによって、わたしたちはみな努めて供給する命を生きるべきです。

実を結ぶ命

コリント人への第二の手紙で見る供給する命は実を結ぶ命です。わたしたちは「霊的で」、「聖く」、「勝利を得て」、しかも実を結ばないかもしれません。そのような霊性、聖さ、勝利には問題があります。それらの資質が本物でまた真実であるかどうかは疑問です。人が実を結ぶことなしに「霊的」であり得ることは、異常ではないでしょうか？ 聖書によれば、霊的であるのは実を結ぶためです。ヨハネによる福音書で、主はわたしたちに霊的で、聖く、勝利を得るようには告げておられません。そうではなく、ヨハネによる福音書第15章で主は、実を結ぶように、さらに多くの実を結ぶ

ように、実が残るようにと命じておられます。これが供給する命を生きることです。

わたしの家の周りには桃、レモン、オレンジなど、多くの実を結ぶ木があります。かなり長い期間、ある木は何も実を結びませんでした。実がならないので、わたしたちはそれらを取り除こうかと考えていました。これらの木は実を結ばなかったのですが、^{じつ}実によく成長し続けました。事実、それらは葉が繁り、青々としていました。それにもかかわらず、そのように成長すればするほど、わたしはそれらに関してますます煩わされました。時にはその木を見て言いました、「おまえたちという木はここで何をしているのか？ おまえたちは葉を繁らせ、枝を伸ばしているが、何の実も結んでいないではないか？」。わたしたちはこれを、「靈的で」、「聖く」、「勝利を得る」のに、実を結ばない信者たちの例証としてもよいでしょう。彼らが実を結ばないのは、供給する命を持たないからです。わたしたちがみな供給する命を持たなければならないことを見るのは、極めて重要です。

わたしは若いころ、コリント人への第二の手紙第7章についていくつかのメッセージを聞きました。それらのメッセージの強調は、神にしたがって悲しむことについてでした。それらのメッセージは、わたしたちが神にしたがって悲しむなら、悲しんだことを後悔しないことを指摘しました。しかし、わたしはこの点についていくつかのメッセージを聞きましたが、この章でのパウロの感覚や靈については何も告げられませんでした。ここでわたしたちは、彼の親密な心遣いを見ます。

真の心遣いの必要

靈的な事柄では知識があり、宣べ伝えにおいては力強くなり、しかも依然として実を結ばない可能性があります。事実、実を結び、命を供給するのではなく、そのような人は他の人を死なせるかもしれません。ある兄弟は他の地方を訪問し、特別集会を持ちますが、その特別集会の結果、多くの人々が殺されるかもしれません。彼らは間違った言葉によってではなく、正しい言葉によって殺されます。さらに、聖徒たちを牧養することで、わたしたちは人を殺す可能性があります。この殺すこと、実のない理由は、親密な心遣いに欠けることによります。ある特定の召会で特別集会を持つ兄弟は、メッセージを与えることにしか関心がないかもしれません。彼はその地における召会に対して真の心遣いを持たないでしょう。同じように、わたしたちはある家庭を訪問し、彼らを牧養するとしても、愛の心遣いを持たないかもしれません。むしろ、わたしたちの動機は自分の知識、靈性、賜物、才能を見せびらかすためであるかもしれません。その結果は殺すことです。

ある母親は知恵に欠けているようです。しかしたとえ彼女たちは聡明でなくても、とても立派に子供を育てます。なぜなら、彼女たちには子供に対して愛の心遣いがあるからです。そのような母親は、子供に対して優しい、親密な心遣いを持っています。その反対に、ある継母は知識があり、賜物があり、聡明であるかもしれません。しかしながら、彼女たちには子供に必要な心遣いが欠けています。子供を顧みるとき、最も重要なことは知識や才能ではありません。それは親密な心遣いです。召会を

顧みることにおいて、あるいは聖徒たちを牧養することにおいても同じです。必要なことは供給する命の親密な心遣いです。諸召会で特別集会を開く兄弟たちは、諸召会に対して真の心遣いを持たなければなりません。彼らは単に、すばらしいメッセージを与えて自分の知識、才能、能力を見せびらかそうとすることだけに関心を持つべきではありません。

わたしは若かったころ、コリント人への第二の手紙第7章にいくらか煩わされました。わたしは聖書を聖なる、古典的な書と考えていました。そしてわたしにとって、コリント人への第二の手紙第7章は、古典的な文書でないように見えました。わたしはなぜ聖書の中に、ローマ人への手紙第5章や第8章のような章があるのか、理解することができましたが、なぜコリント人への第二の手紙第7章のような章が含まれているのか、わかりませんでした。6節でパウロは、テトスが来てくれたことで慰められたと言い、7節で続けて言います、「ただ彼が来たことによってだけでなく、彼があなたがたのゆえに慰められたその慰めによっても、慰められました。そして彼があなたがたの切望、あなたがたの嘆き、わたしに対するあなたがたの熱意を、わたしたちに知らせてくれたので、わたしはますます喜びました」。わたしにとってそのような節は、聖書にあるべきではないように見えました。あなたはどのようにしてコリント人への第二の手紙第7章が新約聖書にあるのか、調べたことがあるでしょうか？ もしあなたがそれについて考えたことがないなら、これはあなたが御言を読むことで、いくらか不注意であることを示すでしょう。わたしは、この章に注意を払えば払うほど、ますますそれを愛するようになり、ますますそれから学び、それによって影響を受けるようになると、証しすることができます。

この章は、わたしたちは親密な心遣いが必要であることを啓示します。もしわたしたちが働きを遂行する能力があっても、親密な心遣いに欠けるなら、わたしたちの働きには実がないでしょう。良い家庭生活と召会生活を確立するために必要なことは、親密な心遣いです。わたしたちがどれほど実を結ぶか、どれほど多く実を結ぶかは、わたしたちができることにはよりません。それはわたしたちが親密な心遣いを持っているかどうかによります。

二一兄弟は、福音を宣べ伝えるとき、わたしたちは人に対して真の心遣いを持つ必要があると告げました。わたしたちが人に対して正当な心遣いを持つ限り、彼らの救いのために神に用いられるよう資格づけられる途上にあります。これについてのとても良い証しが、「見たこと聞いたこと」という本の中にあります。その本の中で、著者ジェームズ・マッケンドリックは、一言も言わずに未信者の群れの前に立って泣くことについて告げています。それにもかかわらず、多くの人が救われました。なぜなら、彼には深い心遣いがあったからです。雄弁、賜物、力は、決して彼らに対するあなたの心遣いほど、深く人に触れることはできません。

コリント人への第一の手紙で、パウロは子供を取り扱う父親のようでした。しかしこの取り扱いでさえ、深い親密な心遣いから出て来ました。例えば、母親は子供の一人をたたきます。しかしたたかわれている間、その子供は母親が愛する霊と態度でし

かっていることを知ります。こうして、彼女は子供をたたいている時でさえ、彼を愛することができます。子供は、親が愛の霊からしかっているのかどうか、告げることができます。パウロがコリント人への第一の手紙を書いたのは、愛し気遣う霊をもってでした。確かに、コリント人への第二の手紙全体の中で、特に第7章で、信者たちに対するパウロの親密な心遣いを見ます。

人を温める

コリント人への第二の手紙第7章でパウロはとても感情的でした。13節で彼は、「テトスの喜びのことで、さらにあふれるばかりに喜びました」と言います。J・N・ダービーは、「さらにあふれるばかりに」というギリシャ語特有の語法を、正確に英語に訳すことは不可能であると指摘しています。パウロは命を供給することで、とても人情味があり感情的でした。パウロが感情的であったのは、彼の心遣いがとても深く、親密であったからです。このような心遣いがなければ、パウロのように、あふれるばかりに喜ぶことは決してできません。そうではなく、わたしたちは冷凍庫のように冷たく、聖徒たちに対して心遣いに完全に欠けるでしょう。人を温めるどころか、彼らをさらに冷やしさえするでしょう。そのような凍った状態の中では、何も成長することはできません。わたしたちは春の季節が来て、わたしたちをとかし、わたしたちの命を温めることを必要とします。再び、供給する命の必要があります。あなたは供給する命が何であるか、知っているでしょうか？ それは人を温める命です。人を温めることを学びなさい。これは彼らに対して親密な心遣いを持つことです。

多くの人は、コリント人への第二の手紙第7章を読んできましたが、パウロの親密な心遣いの事柄に触れることがありませんでした。もしわたしたちが人に対してこのような心遣いを持たないなら、実を結ばないでしょう。わたしが聖徒たちに命を供給しようとするなら、彼らに対して真の心遣い、感情的で、深く、親密な心遣いを持たなければなりません。時には、人には愚かで、気が狂ったかと思われるほどの心遣いがなければなりません。

パウロの懇願

第7章2節でパウロは言います、「わたしたちに心を開いてください。わたしたちはだれに対しても不正を行わず、だれをも堕落させたことはなく、だれからもだまし取ったことはありません」。第6章14節から第7章1節の率直な勧めは、挿入的に与えられています。これは、そらされた信者たちを、汚すものに触れることから、彼らの聖なる神へ連れ戻して、彼らが完全に神に和解させられるためです。ですから、第7章2節は、実は第6章11節から13節の継続であり、使徒たちに対して心が広げられ、使徒たちのために心を開くようにと、信者たちに懇願しています。この節からこの章の終わりで、使徒は彼の懇願の中で信者たちに対する彼の親密な心遣いを表現し、彼らが慰められ励まされて、主に完全に和解させられた後、積極的に主と共に前進するようにしたのです。

パウロは「わたしたちに心を開いてください」と言うとき、実はコリント人にこう言っているのです。「兄弟たち、わたしはあなたがたの中に入って、あなたがたの中に住みたいのです。しかしあなたがたは狭くて、自分を閉ざしています。あなたがたはわたしたちを受け入れる広くされた心を持っていません。わたしはあなたがたを愛しており、あなたがたに関心があります。ですから、わたしはあなたがたに、わたしたちに心を開いて、わたしたちがあなたがたの中へと入り、あなたがたの中に住むことができるようにと勧めるのです」。

もしあなたが、パウロが2節で持っているような霊を持たないで、他の地方にある召会を訪問するなら、他の人よりも霊的な事について知識があり、彼らに供給するものを持っているという潜在的な感覚があるかもしれません。これは、わたしたちが必要とする態度ではありません。しかし仮に、パウロが2節で行なっているのと同じように聖徒たちに訴え、彼らが心を開いて、あなたが彼らの心の中に住めるようにと勧めるとします。必ず、これはとても深く人に触れるでしょう。

2節でパウロは、彼らはだれに対しても不正を行わず、だれをも堕落させたことはなく、だれからもだまし取ったことはないと言います。それはパウロが自己弁護しているかのようですが、彼の弁護は親密で愛すべき方法においてです。

3節でパウロは続けます、「わたしがこのことを言うのは、あなたがたを罪に定めるためではありません。なぜなら、前にも言ったことですが、あなたがたはわたしたちの心の中にあり、わたしたちと共に死に、共に生きるに至るからです」。ここに、ていねいで、丁寧な話ではなく、親密な関係の表現があります。パウロの話し方は率直ですが、とても親密で心に触れます。パウロがこのようにコリント人に語ることは、彼と彼らとの間に親密な関係があったことを見せています。親密である人たちに対してだけ、わたしたちはこのように語ることができます。

3節でパウロは、コリント人は使徒たちの心の中であって、共に死に、共に生きるときと言います。ここでパウロはこう言っているかのようです、「わたしがこのことを言うのは、あなたがたを罪に定めるためではありません。なぜなら、前にも言ったことですが、あなたがたはわたしたちの心の中にあるからです。わたしたちはあなたがたをわたしたちの心の中に持っており、またわたしたちの心は広げられているので、わたしたちはあなたがたに、あなたがたの心を広くし、わたしたちのために心を開くよう、あなたがたに訴えます。コリント人よ、あなたがたはわたしたちの心の中であって、わたしたちと共に死に、共に生きるに至るのです」。何と深く、優しく、親密な言葉でしょう！ 何と深く触れることでしょう！

深い心遣いのゆえに慰められ、喜びに満ちあふれる

4節は続きます、「あなたがたに対して、わたしは極めて大胆になっています。わたしはあなたがたを大いに誇っています。わたしは慰めに満たされ、わたしたちのすべての患難の中で、喜びに満ちあふれています」。このギリシャ語は、文字どおり

には、その慰め、その喜びであり、特別な慰め、特別な喜びを指しています。ここでもパウロの言葉は親密で心に触れます。

5節でパウロは言います、「さて、わたしたちがマケドニアに来た時、わたしたちの身には安らぎがなく、あらゆることで悩まされており、外には戦いがあり、内には恐れがありました」。この身は、体と魂を含む外なる人を指しています。外には戦いがあり、内には恐れがありました。戦いと恐れは、外なる体と内なる魂と関係があります。身には安らぎがないというのは、霊に安息がないのとは異なります(2:13)。

6節は言います、「ところが、落胆している者を慰める神は、テトスが来てくれたことによって、わたしたちを慰めてくださいました」。使徒は、彼の最初の手紙を読んだコリントの信者たちがどのように反応したかについて、非常に心配していました。ですから、彼の霊には安息がなく(2:13)、ひどく落胆していたほどでした。そしてテトスに会って、コリント人の反応についての情報を得ることを切望していました。今やテトスが来ただけでなく、彼らが積極的な反応をしたという喜ばしい知らせをもたらしました。これは使徒にとって、大きな慰めでした。

パウロは7節で続けます、「ただ彼が来たことによってだけでなく、彼があなたがたのゆえに慰められたその慰めによっても、慰められました。そして彼があなたがたの切望、あなたがたの嘆き、わたしに対するあなたがたの熱意を、わたしたちに知らせてくれたので、わたしはますます喜びました」。ここで再び、パウロは彼の心遣いのゆえにとっても感情的です。

わたしたちはみな、心が広げられ、完全に神に和解させられる必要があります。そうすれば、わたしたちは供給する命、多くの実を結ぶことができる命を持つでしょう。供給する命だけがわたしたちに実を結ばせません。実を結ぶことは供給する命の結果です。(コリント人への第二の手紙ライフスタディ、第44編)